

二十四節気

季秋	晩秋	旧暦九月	寒露	10月8日	霜降	10月24日
孟冬	初冬	旧暦十月	立冬	11月8日	小雪	11月23日
仲冬	中冬	旧暦十一月	大雪	12月7日	冬至	12月22日
季冬	晩冬	旧暦十二月	小寒	1月6日	大寒	1月21日

2016年の旧暦一月一日(「春節」)は、グレゴリオ暦の2月8日。

辞世

前原一誠(1834～1876)

欲掃元悪不顧身 元悪を掃はんと欲して 身を顧みず  
 死生得失風前塵 死生 得失 風前の塵  
 生来初灑丈夫淚 生来 初めて灑ぐ 丈夫の涙  
 不孝兄弟殉国人 不孝なる兄弟 殉国の人

ジセイ。マエバライツセイ。ゲンアクをハラわんとホッしてミをカエリみず。シセイ、トクシツ、フウゼンのチリ。セイライ、ハジめてソソぐ、ジョウフのナミダ。フコウなるキョウダイ、ジュンコクのヒト。

【注】前原一誠：維新の十傑の一人。萩の乱で「殉国軍」として決起するが、鎮圧され刑死。大河ドラマ「花燃ゆ」では佐藤隆太が演じた。○元悪：元凶。○殉国：国のため自分の命を棄てること。○不孝：この詩では親よりも先に死ぬことを指す。

富岡 (二首のうちの一首)

尾高惇忠(1830～1901)

遠望近観呼快哉 遠望 近観 快哉を呼ぶ  
 俄然高厦現靈臺 俄然 高厦 靈臺に現はる  
 皇猷嘉納西洋術 皇猷 嘉納したまふ 西洋の術  
 移得斬新奇器来 斬新なる奇器を移し得て来る

トミオカ。オダカ・アツタダ。エンボウ、キンカン、カイサイをサケぶ。ガゼンとしてコウカ、レイダイにアラわる。コウユウ、カノウしたもう、セイヨウのジュツ。ザンシンなるキキをウツシエてキタる。

【注】富岡：群馬県富岡市。世界遺産となった富岡製糸場が経営不振で閉鎖寸前になつ

たとき、大河ドラマ「花燃ゆ」の小田村伊之助（楯取素彦）の嘆願と努力によって存続した。○尾高惇忠：近代日本の実業家・渋沢栄一の義兄で、栄一に『論語』を教えた師（※）。富岡製糸場の初代場長もつとめた。○遠望・近観：遠くから見る人と、近くで見る人。○高厦：高層建築。○靈臺：靈台。魂が宿る神聖なところ。富岡製糸場を建設する前、尾高と義弟の渋沢栄一は妙義神社に参詣し、西洋風の建物をこの地に建てることについて神に報告した。○皇猷：天子が国をおさめるために立てる計画。○移得斬新奇器来：「お雇い外国人」であるフランスのポール・ブリューナ (Paul Brunat) は、地元の在来の製糸法をふまえた上で新しい製糸場用の機械を特別発注し、日本まで運び、明治五年(1872)に操業を開始した。

(※関連情報) 渋沢栄一記念財団(電話03-3910-2314)  
「論語とそろばん」セミナー2016 2月10日(水)夜、東京駅北口の会場にて  
「伝統と現代、それぞれの『論語』の読み方」講師：加藤 徹

### 邯鄲冬至夜思家

白居易(772～846)

邯鄲駅裏逢冬至 邯鄲の駅の裏 冬至に逢ふ  
抱膝灯前影伴身 膝を抱けば 灯前 影のみ身に伴ふ  
想得家中夜深坐 想ひ得たり 家中 夜 深く坐すと  
還応説著遠行人 還た応に遠行の人を説著するなるべし

カンタンのトウジのヨル、イエをオモウ。ハクキョイ。カンタンのエキのウチ、トウジにアウ。ヒザをイダけば、トウゼン、カゲのみミにトモナウ。オモイエたり、カチュウ、ヨル、フカクザすと。またマサにエンコウのヒトをセツチャクするなるべし。

【注】唐の貞元二十年(804)の暮れ、役人だった三十三歳の作者が、現在の河北省邯鄲市にあった駅舎で詠んだ旅愁と愁眠の七言絶句。○想得：想像することができる、自然と思ひ浮かぶ。○家中：故郷の家族。説著：口語体の漢語で、「説」は喋る、「著」(着)は「しつている」。○遠行人：遠く旅している人。作者自身を指す。

han2 dan1 dong1 zhi4 ye4 si1 jia1      bai2 ju1 yi4  
han2 dan1 yi4 li3 feng2 dong1 zhi4 / bao4 xi1 deng1 qian2 ying3 ban4 shen1 / xiang3 de2  
jia1 zhong1 ye4 shen1 zuo4 / hai2 ying1 shuo1 zhe0 yuan3 xing2 ren2

### 猿猴が月を取る

★来年の干支は丙申(へいしん)。ひのえさる(猿)

《僧祇律》七の、猿が井戸に映った月を取ろうとして水におぼれたという故事から《身

分不相応な大望を抱いて破滅することのたとえ。猿猴捉月(そくげつ)。猿猴が月。猿猴が月に愛をなす。 — デジタル大辞泉の解説

### 『摩訶僧祇律』卷七

法顯記

佛告諸比丘。過去世時、有城名波羅奈、國名伽尸。於空閑處、有五百獼猴。遊行林中、到一尼俱律樹。樹下有井、井中有月影現。

時獼猴主見是月影、語諸伴言「月今日死落在井中。當共出之。莫令世間長夜闇冥」。共作議言、云「何能出」。時獼猴主言「我知出法。我捉樹枝、汝捉我尾、展轉相連、乃可出之」。

時諸獼猴即如主語、展轉相捉。小未至水。連獼猴重。樹弱枝折、一切獼猴墮井水中。爾時樹神便說偈、言、

是等駭榛獸 癡衆共相隨 坐自生苦惱 何能救世間

佛、諸比丘に告ぐ。

過去世の時、城の波羅奈と名づく、國の伽尸と名づく有り。空閑の處に於て、五百の獼猴有り。林中を遊行し、一の尼俱律樹に到る。樹下に井有りて、井の中に月影の現はるる有り。

時に獼猴の主、是の月影を見、諸伴に語りて言ふ「月、今日、死して落ち、井の中に在り。當に共に之を出だすべし。世間をして長夜闇冥ならしむること莫かれ」と。

共に議言を作して云ふ「何ぞ能く出ださん」と。時に獼猴の主、言ふ「我、出だす法を知る。我、樹の枝を捉へ、汝、我が尾を捉へ、展轉して相連れば、乃ち之を出だすべし」と。

時に諸獼猴、即ち主の語るが如くし、展轉して相捉ふ。小さきもの未だ水に至らざるに、連りし獼猴は重し。樹弱く枝折れて、一切の獼猴は井の水の中に墮つ。

爾の時、樹神、便ち偈を説きて言ふ、

是れらの駭かなる榛獸 癡衆は共に相隨ふ

坐ろに自づから苦惱を生ず 何ぞ能く世間を救はんや

【語注】摩訶僧祇律(まかそうぎりつ)：仏教の大衆部に継承されてきた「律」。○法顯(ほっけん。337〜422)：東晋時代の訳経僧の名前。○波羅奈：はらな。「波羅奈国」。インド北部の宗教都市 Varanasi(カナ表記はバラナシ、ワーラーナシ、ベナレス、バナールス、等)。○獼猴：サル。○尼俱律樹：大きな木の一種。英訳は nyagrodha tree、漢訳は尼拘律樹、尼俱類樹とも。○獼猴主：サルたちのリーダー。○駭：愚駭(ぐがい)、痴駭(ちがい)。○榛：シン。はしばみ。

見ざる、聞かざる、言わざる、の「三猿」(さんえん／さんざる)

「和漢三才図会」卷之四

「時侯類」庚申の条より

有本尊、号青面金剛。其前有三猴。一以両手塞眼、一塞耳、一塞口。以爲不視、不聴、不言之戒乎。

本尊有り、青面金剛と号す。其の前に三猴有り。一は両手を以て眼を塞ぎ、一は耳を塞ぎ、一は口を塞ぐ。以て視ざる、聴かざる、言はざるの戒と為すか。

ホンゾンアリ、ショウメンコンゴウとゴウす。ソのマエにサンコウアリ。イツはりョウテをモツてメをフサギ、イツはミミをフサギ、イツはクチをフサグ。モツてミざる、キかざる、イわざるのイマシメとナすか。

【語注】『和漢三才図会』(わかんさんさいずえ)：江戸時代の医師・寺島良安(てらじま りょうあん)が、明の王圻(おうき)による類書『三才図会』に範にとつて編纂した類書。正徳二年(1712)に成立。○青面金剛：青面金剛明王。庚申講の本尊である夜叉神(やしん)やしやがみ)。○三猿：三猿(さんえん／さんざる)と同じ。

参考 「見聞言動」の「四猿」の教え

『論語』顔淵第十二より

顔淵問仁。子曰「克己復礼為仁。一日克己復礼、天下帰仁焉。為仁由己、而由人乎哉」。顔淵曰「請問其目」。子曰「非礼勿視、非礼勿聴、非礼勿言、非礼勿動」。顔淵曰「回雖不敏、請事斯語矣」。

顔淵(がんえん)仁(じん)を問(と)ふ。

子(し)曰(のたまわ)く「己(おのれ)に克(か)ちて礼(れい)に復(か)えるを仁(じん)と為(な)す。一日(いちじつ)己(おのれ)に克(か)ちて礼(れい)に復(か)れば、天下(てんか)仁(じん)に帰(き)す。仁(じん)を為(な)すは己(おのれ)由(よ)る。人(ひと)に由(よ)らんや」と。

顔淵曰(いわ)く「請(こ)ふ、其(その)の目(め)もくを問(と)はん」と。

子(し)曰(のたまわ)く「非礼(ひれい) 視(み)る勿(な)かれ、非礼(ひれい) 聴(き)く勿(な)かれ、非礼(ひれい) 言(い)ふ勿(な)かれ、非礼(ひれい) 動(うご)く勿(な)かれ」と。

顔淵(がんえん)曰(いわ)く「回(かい)不敏(ふびん)なりと雖(いえど)も、請(こ)ふ、斯(こ)の語(ご)を事(こと)とせん」と。



かうまん  
庚申

捨芥抄云庚申夜誦文彭候子彭常子命兒子悉入幽冥之中  
去離我身每庚申向寢而呼其名三尸永去萬福自來太平廣  
記云彭者三屍之姓也常在人身中伺察其所為罪每庚申日  
告上帝故此夜不寢而守三屍

後双紙庚申夜寢誦文  
之や虫はいねやさりねや我床をねたれとねぬそねぬそねたれそ  
僧史畧云近間周鄭之地邑社多結守庚申會初集鳴鑿鉞唱  
佛歌讚衆人念佛行道或動絲竹一夕不睡以避三彭奏上帝

和漢三才圖會卷之四 時候類

免註罪奪算也然此實道家之法往往有無智釋子入會圖謀  
小利不尋其根本誤行邪法深可痛哉

東國通鑑云高麗元宗王六年南宋庚申歲宗成淳元年日本常四年四月庚  
申太子邀宴安慶公倡奏樂達曙國俗以道家說每至是日  
必會飲徹夜不寐謂之守庚申太子亦徇時俗時義非之

本朝朱雀天皇天慶二年內裏始有庚申御遊  
△按庚申待相傳文德帝時智證大師入唐傳之來矣宇多醍

醐朝專行之有管相丞庚申詩攝州天王寺傍有庚申堂此  
申堂未知始於何時有緣起曰文武帝大寶元年庚申正月

七日僧住善蒙帝釋使告始修之省文蓋大寶元年辛丑以  
知偽作且有本尊號青面金剛其前有三猴一以兩手塞眼

一塞耳一塞口以爲不視不聽不言之戒乎凡病人逢庚申  
日則必不快者多也蓋六十花甲之中支干五行比和者惟

十二日謂之十二專詳於入庚申亦其一而此日最忌合交  
故其夜不寢而守者道家養生之本也加之釋氏幸指此日

以爲勸善懲惡之便亦不宜乎彼岸六齋等之教亦准之但  
泥之欲得幸福者惑之甚耳  
みすきかすいはる三ツのさるよりも思はさるこそまざるにけれ